

—— 伝説の作品を体感する ——

「日本美術サウンドアーカイヴ | 高見澤文雄《柵を越えた羊の数》 1974年」

2月11日、上原昇君(2組)と共に高見澤文雄君(8組)のアートイベントに行ってきた。

展示作品の《柵を越えた羊の数》は、1974年 第11回東京ビエンナーレ展に出品された“音を用いた70年代の伝説的な作品”。過去の音による作品を探求するプロジェクト・日本美術サウンドアーカイヴの依頼により、今回再構築されたものだ。

- 睡眠時にベッドの中で、口元にマイクを設置しテープレコーダーを録音状態に作動させたまま、声を出して1から意識のある限り、数を数え続けて録音する。
- 録音されたテープを再生し、自身で聞きながら数の記録と同時に、1を0として、1から始まる時間を数ごとに何分何秒単位で記録する。

…作品はこのルールで44年前に制作された。

誰でも経験があろう眠れぬ夜の呪文、羊が1匹、羊が2匹… と数えるあれである。

幾夜もそれを続ける高見澤の姿を想像すると笑えてしまう。(いや、失礼)

残念ながら当時のSONYラジカセは用意できなかったが、音源テープは当時のオリジナル。会場に並べられた25台のカセットデッキから25日分、26歳の高見澤の声が再生され、読経の如く一斉に流れてくる。カセット上部の壁面にはその日の声の記録用紙が貼られている。27で終わっているものもあれば、700を超えてTAPE STOPまで数え続けているものもある。

不思議な音の世界が展開される。



【写真1: 今回再構築された《柵を越えた羊の数》の展示会場(南青山 Art & Space ここから)】

44年ぶりのご対面となる私としては、会場の広さ・音響レベルに物足りなさを感じるが、諸事情・作品の意図を勘案すると、これで良しとすべきだろう。

この作品を初めて体感する上原君も、「発想が面白いよね。自分も26歳の頃、どこで何をしていたんだろーと、思い返しながらか鑑賞しているよ」… と高見澤ワールドに浸っていた。

当時(1974年)この作品を見た故 寺山修司が「'74 現代詩手帖12月号」で、意識と無意識の越境を記録しようという試みであり、シュール・レアリズムの手法(自動手記)の世界に、カセットテープレコーダーという記録機械を持ち込むことで、新しい「複製芸術」の可能性に挑んだものであった…と絶賛している。

翌年、寺山が主宰する天井桟敷の市街劇で、「柵をこえた羊の数をかぞえる」として続編が上演された事でも、その注目度が窺える。あのアングラ劇団のイベントに参加していたとは、驚いた。

そんなエピソードも交え、

19時からは高見澤の作品歴に関するトークイベントが、彼の作家仲間も多数参加して開かれた。



【写真2:トークイベントの様子】スクリーンの画像は'74年の《柵を越えた羊の数》展示会場、マイクを持っているのが高見澤君です。(壁面の作品は今回のイベントには関係ありません。)

《柵を越えた羊の数》を基軸に、我々の高校卒業50周年DVDにも掲載されている絵画作品に至るまで、高見澤作品の根底となる「記憶」「記録」「痕跡」「繰り返し」「重なり合い」のキーワードが、時代や素材を変えながらどう表現されてきたのか、興味深く語られていく。今回展示された音の作品と近作「波の網」「網の波」の間には、一見何の関係性も無いように見えるが、キーワードを辿っていくと、そうでないことが良く判る。

根掘り葉掘りのやり取りに、終始お手柔らかにの対応。強がらないのがいかにも高見澤らしくていい。「僕はしつこいですから…」。締めくくりに言ったフレーズが、こちらの記憶にも深く残る楽しいイベントとなった。



【写真3:2018年の制作作品】 「波の網」と「網の波」

彼には昨年急逝した同じ8組の画家 塩川高敏君の分まで、これからも「しつこく」制作活動を続けていって欲しいものである。

2018.2.16 澤崎健一(3組)